

【論 説】

# 1960年代のスリランカ政治と N.Q. ダヤス

川 島 耕 司

## 目 次

はじめに

- 1 新政権と N.Q. ダヤス
  - 2 学校の国有化
  - 3 軍隊の仏教徒化
  - 4 1962年のクーデター未遂事件
  - 5 BJBの設立とボーヤ日
  - 6 1966年のクーデター未遂事件
- おわりに

## はじめに

スリランカでよく耳にする言葉に、「スリランカ、特にシンハラ社会のカースト問題はインドほど深刻ではない」というものがある。おそらくそれは間違っていない。総じて言えばこの問題に関する状況はインドの方がはるかに深刻であろう。しかし言うまでもないが、このことはシンハラ人のカースト問題を無視してよいということにはならない。少なくとも本稿が扱う20世紀半ばの政治においてはカーストはかなりの重要性をもっていた。特に非ゴイガマのエリートにとってはカーストは明らかに深刻な問題であった。政治の世界においては最も数が多く、しかも高位であるとされるゴイガマ・カーストが優位に立つことは当時においては自然であるとされた<sup>1)</sup>。

実際、シンハラ人議員の圧倒的多数はゴイガマであった。たとえば、1956年7月の選挙で選ばれたゴイガマの議員は全議員の57.6パーセント、シン

1960年代のスリランカ政治と N.Q. ダヤス（川島）

ハラ人議員の 72 パーセントを占めていた<sup>2)</sup>。さらに、よく知られているように、最高権力者（1978 年までは首相、それ以後は大統領）のほとんどはゴイガマである。ラナシンハ・プレマダーサ（大統領、1989-1993 年）は唯一の例外である。少なくともエリート・レベルにおいては間違いなく圧倒的にゴイガマが有利であった。こうした状況のなかで、非ゴイガマのエリートたちはどのような状況におかれ、どのような行動をとり、そしてそのことは政治にどのような影響を与えたのだろうか。こうした点はほとんど明らかにされて来なかったように思われる。

私はこれまで N.Q. ダヤスというカラーワ・カーストに属する行政官を中心に 20 世紀半ばのスリランカ政治を考察してきた。具体的には、非ゴイガマと政治、1956 年の政治改革、仏教とナショナリズムといった問題を中心にスリランカ政治のあり方を考えてきた。本稿においては 1960 年代前半の政治過程とダヤスとの関連を明らかにしたい。これは過激な仏教ナショナリストであったダヤスが行政官としてきわめて大きな影響力を発揮した時期である。そしてそれは同時にスリランカ社会における民族的、宗教的コミュニティ間の対立がますます深まっていった時期でもあった。この時期のダヤスの政治的活動に関しては断片的な指摘はあるものの今まで十分には検証されて来なかった。本稿ではイギリス公文書館所蔵の行政文書などを使いつつこの点を明らかにしていきたい。

## 1 新政権と N.Q. ダヤス

S.W.R.D. バンダーラナーヤカ首相が暗殺されたのは 1959 年 9 月のことであった。この事件によって未亡人となったシリマーウォー・バンダーラナーヤカは予期せぬ形で、そして政治的経験をほとんど欠いた状態で政治の場に登場することになった。しかし彼女はほどなく積極的に政治に関与し始めた。彼女によればそれは、「夫が非常に愛し、そして夫を熱愛する何百万というこの国の人々のためにできる限りの貢献をする」ためであり、そうする

ことが「亡き夫への義務であると強く確信した」からであった。実際、バンダーラナーヤカ夫人は夫の政策を継承すると繰り返した。「涙に暮れる未亡人」というイメージは多くの人々に訴えるものがあった<sup>3)</sup>。1960年3月の選挙では彼女はスリランカ自由党の候補者たちを応援した。同年7月に再度行われた選挙の前には党首に指名され、「恐るべき集票パーソナリティ」とも呼ばれることになる能力を発揮し、同党に勝利をもたらした<sup>4)</sup>。

しかし選挙後首相に就任したバンダーラナーヤカ夫人は必ずしも夫の政策を継承しなかった。彼女の態度は特にシンハラ仏教ナショナリズムへの対応に関しては夫のそれとは大きく異なっていた。彼女の夫はステーツマンシップを発揮してコミユナルな融和を図ろうとした。少なくとも彼は努力した。しかし彼女にはそのような意図は初めからほとんどなかったようにみえる。1960年の総選挙では「過激な戦闘的仏教徒諸団体」が彼女を支援した。彼女は首相就任後そうした勢力の要請に応えることに夫のように躊躇しなかった。こうして過激なナショナリストたちは「彼ら自身の目的を達成するために利用可能な手段を新政権のなかでとうとう獲得した」と感じたのであった<sup>5)</sup>。実際、彼女の政権下で民族的対立はますます激化し、彼女は「タミル人の軍事的闘争の母」だとも呼ばれた<sup>6)</sup>。

イギリス人外交官のコロンボからの報告によれば、N.Q. ダヤスが外交に関わる行政を統制するようになったのは1960年のことであった。つまりバンダーラナーヤカ夫人の首相就任の年である。翌年の1961年5月には彼は何人かの高位の役職者を飛び越して正式に国防外交常任長官（Permanent Secretary, Ministry of Defence and External Affairs）に抜擢された。ダヤスは形式的には一公務員にすぎず、他の閣僚たちの意向にも配慮しなければならない立場にあったが、事実上の「自由裁量権（free hand）」を与えられた<sup>7)</sup>。セイロン高等文官（Ceylon Civil Service）に属するエリート行政官としてダヤスの下で働いたジャヤウィーラはその回想録のなかで、N.Q. ダヤスは「最も強力な公僕」であり、バンダーラナーヤカ夫人に対する彼の影響力のために閣僚たちでさえ彼を畏怖し、メディアの一部は彼を公然と「ツァ

1960年代のスリランカ政治と N.Q. ダヤス（川島）

ー（The Tsar）」と呼んだと記している<sup>8)</sup>。

ダヤスがどのように1960年代前半においてバンダーラナーヤカ夫人の側近となったのかは必ずしも明らかではない。ただ1960年に夫人がほとんど突然とでも言いうる形で国家の最高権力者となったとき、彼女は政治に関して明らかに無知であった。高位の行政官として長くスリランカ政治に関わってきたN.Q. ダヤスは彼女にとっては間違いなく頼るに値する人物の1人であった。またダヤスはカラーワであり、その点で彼女の地位を脅かす可能性がないという配慮が「驚くほどの抜け目のなさ」をもっていたとされる夫人にはあったのかもしれない<sup>9)</sup>。ダヤスもまた政治的野心を表明するような不合理な行動は取らなかった。ジャヤウィーラが指摘するように、彼は「政治に手を染めずに政治的状况を変えようとした」のであろう。いずれにせよ、こうしたダヤスの姿勢にバンダーラナーヤカ夫人は安心し、多くに関してダヤスに相談した<sup>10)</sup>。

バンダーラナーヤカ夫人がシンハラ仏教ナショナリズムに対してきわめて親和的であったこともダヤスが側近となり得た理由の一つであったと思われる。すでに触れたように、彼女は夫ほどマイノリティへの配慮を示すことはなかった。こうした彼女の基本姿勢は、「過激な仏教的シンハラ指向的民族感情」が蔓延する当時においてさえ過激だといわれたダヤスをも十分に許容しうるものであった<sup>11)</sup>。またダヤスは「無数の」仏教徒組織とのつながりをもっていた<sup>12)</sup>。さまざまな仏教徒勢力との関係から生まれる彼の影響力がダヤスを重用すべき人物であると夫人に思わせた一因であったと言えるかもしれない。さらに、すでに見たように、1960年の総選挙においては「きわめて戦闘的な仏教徒集団」が夫人を支援した<sup>13)</sup>。選挙における何らかの活動がダヤスを政権に近づけたことも十分に推察される。

いずれにしても N.Q. ダヤスはバンダーラナーヤカ夫人の側近として強力な権力を行使することになった。彼はさまざまな事項に積極的に関わった。特に、軍隊や警察の運用、政府の移民政策において強い影響力を発揮した。彼はたとえば行政組織の中に「活動的な仏教徒団体」を設立すること、そし

て軍隊への採用は事実上 100 パーセントをシンハラ人仏教徒にするよう努めた。そうすることで、「歴史的理由によって非仏教徒や非シンハラ人がこれまでもって来た圧倒的な支配力」と彼がみなすものを打ち破ろうとした<sup>14)</sup>。彼が打倒すべき対象であると考えたものの一つに植民地時代につくられた教育制度におけるキリスト教徒の優位性があったことは明らかであった。バンダーラナーヤカ夫人が戦闘的な仏教徒たちの影響下で最初に着手したのが私立学校の国有化という課題であった。

## 2 学校の国有化

植民地時代のスリランカではエリート教育の非常に多くの部分は西洋のキリスト教宣教団体が作り上げた学校制度によって担われてきた。こうしたキリスト教徒たちの教育分野における優位性の打破は、19世紀後半以降の仏教復興運動が追求した主要な課題の一つであった。しかし仏教徒たちの学校設立の試みは十分には進まず、キリスト教徒との格差を解消することはできなかった。そのため私立学校を国有化せよという要求は仏教委員会の報告書の中でも重要な主張の一つとなった。彼らは、キリスト教徒の学校では仏教徒の子どもたちが宗教教育を受けられないだけでなく、逆に改宗の脅威に晒されざるを得ない、さらには「反仏教的な理念」が吹き込まれる恐れがあると主張し、「1958年1月1日までにすべての助成校を国有化する」ことを要請した<sup>15)</sup>。S.W.R.D. バンダーラナーヤカはこうした主張に共感する人々の圧倒的な支持を得て首相となった。

しかし首相就任後のバンダーラナーヤカはこの仏教ナショナリストたちの主張を受け入れなかった。上記の期限が過ぎた 1958 年 3 月に彼は全セイロン統一比丘会議において助成校の国有化に関して、「私は仏教の諸権利を護ろうと努めるが、他の宗教への壊滅的打撃を企図することはできない」と述べた<sup>16)</sup>。もちろんナショナリストたちは反発した。1959 年ごろになると、過激なシンハラ仏教ナショナリストたちの関心は、タミル人に対してより

1960年代のスリランカ政治と N.Q. ダヤス（川島）

も、ますますカトリック・コミュニティに向けられるようになっていった。さらにこの頃になると、マルクス主義者、特にフィリップ・グナワルデナとその一派も反カトリック感情を扇動し始めた。彼らは教育における既得権益としてのキリスト教系の学校制度を問題とした。その背後には明らかに仏教徒の民衆には「弁証法的唯物論」よりも反カトリック的訴えの方がはるかによく浸透するとみられていたという状況があった<sup>17)</sup>。

学校の国有化に向けた動きは S.W.R.D. バンダーラナーヤカ首相の暗殺後に急速に進んだ。当時スリランカ自由党の広報担当であったフェリクス・ダヤス・バンダーラナーヤカ（バンダーラナーヤカ夫人の甥、後の財務相）は、1960年7月の総選挙の直前に「教育の全システム」を中央政府の下に置くことを検討する委員会を立ち上げるという党の姿勢を表明した。選挙直後の8月12日には新しく首相に就任したバンダーラナーヤカ夫人が助成校の国有化を宣言した。こうして「助成校および訓練校（特別措置）法案」は1960年11月にスリランカ下院において可決され、法制化された<sup>18)</sup>。

この法律の適用範囲は助成を受けない学校にもおよび、私立学校においても学校の事業主の宗教を信仰しない親の子どもを受け入れることは許可されないことになった。また、特定の学校は助成を受けることなく存続することを許されたが、原則的に授業料を取ってはならないこととなった。授業料を課すには教師と親の75パーセントの賛成が必要であるとされた。その結果、非助成校の多くは宗教団体の資金に頼らざるを得なくなった。ただ、これらの制約にもかかわらず、1961年の段階で数十校が私立学校としてとどまった。こうした学校のほとんどは、教育報告書によれば、この国の教育において「卓越した地位」にあった。こうした学校での教育は「雇用に関する厚遇」としばしば関連していると主張された<sup>19)</sup>。

学校の国有化に加えて、バンダーラナーヤカ夫人の第一次政権（1960年から1965年）ではシンハラ語化政策がさらに徹底して実施された。1960年12月には、タミル語と英語の通訳をつけるという条件付きで議会で使用する言語はシンハラ語とすると定められた。1961年1月1日には、タミル人

たちからの要請を拒否し、全国すべてにおいてシンハラ語が公用語であるという声明が出され、法廷における言語をシンハラ語にするという法律が成立した。こうしたシンハラ語化の動きはタミル人側からの強固な抵抗を招き、タミル人の政党である連邦党はサティヤグラハと呼ばれた大規模な不服従運動を主導することになった。こうして1961年2月20日にタミル人たちによるガンディー式の非暴力抵抗運動が始まり、それは1961年4月に軍隊によって制圧されるまで続いた<sup>20)</sup>。

### 3 軍隊の仏教徒化

学校の国有化やシンハラ語化政策と同様に重要な施策は軍隊の仏教徒化であった。N.Q. ダヤスはこれを精力的に進めた。彼はそのための一手段として、軍隊内に「仏教徒の支部組織」をつくり、それらを彼の庇護下において<sup>21)</sup>。「戦闘的仏教徒集団」をつくろうとする彼の試みは三軍のなかでも陸軍において最も成功した<sup>22)</sup>。この戦術、つまりシンハラ仏教ナショナリズムに賛同する人々を中心に多くの小規模なグループを作り、それを組織化するという戦術は過去においても彼が行ってきたものであった。ダヤスはこの能力に秀でていたようにも見える。その最もよく知られた事例の一つは1956年の総選挙の際のものであろう。この時彼は仏教徒の公務員組織を作り、また各地に仏教徒の協会をつくった。この協会は3,500以上にもなり、S.W.R.D. バンダーラナーヤカに歴史的な勝利をもたらす一因になった<sup>23)</sup>。

ダヤスは軍隊への採用において事実上100パーセントがシンハラ人仏教徒となるように努めた<sup>24)</sup>。また、当時の政権、つまりスリランカ自由党政権に「絶対的に忠実」であるか否かも採用、昇進時には綿密に調べられた。こうした人事への関与によって、「将校や他の地位の上層部も非常に厳密に」ダヤスによってコントロールされるようになった<sup>25)</sup>。兵卒に関しては地元のスリランカ自由党所属議員の推薦を受けたシンハラ人農民から多くが採用され、「人種と宗教」に基づく政治的信頼性が陸軍の採用と昇進の基準となっ



1960年代のスリランカ政治と N.Q. ダヤス（川島）

た<sup>26)</sup>。また特定の人物がダヤスの指示によって大きく昇進することもあった<sup>27)</sup>。

ギャムヌ・ウォッチ（Gamunu Watch）連隊と呼ばれる部隊へのダヤスの影響力は特に大きかった。この組織はイギリスのスコットランドにあったブラック・ウォッチ連隊に模して1962年12月に創設された部隊である。ギャムヌという呼称は言うまでもなく紀元前2世紀にタミル王エラーラを撃退した王の名前からとられたものである。この組織はダヤスの近衛連隊（Guards）とみなされることもあった<sup>28)</sup>。

ダヤスによって採用されたり、昇進したりした者たちのなかでは仏教徒至上主義的傾向はきわめて強かった<sup>29)</sup>。多くの兵卒や若い将校たちはシンハラ人や仏教徒を優遇するスリランカ自由党政権の政策に共感しがちとなった。その結果、タミル人による騒乱に対しては彼らの多くはきわめて無慈悲となった。実際、軍隊の間では「タミル人叩き（Tamil bashing）」という行為が「人気の娯楽（popular sport）」となったなどとも報告されている<sup>30)</sup>。

タミル人たちへの弾圧がきわめて過酷なものになったのは、それがダヤスからの指示であったからでもあった。彼は前述のジャヤウィーラに対して、「できる限りあらゆる場面においてタミル人連中には『対立』を強い」、「あらゆる危機的場面において彼らの上に『絶対的な優位性』を確立する」ことを求めた。当時のダヤスの影響力を考えれば、彼の意向がさまざまな形で実行されたことは間違いない。実際、ジャヤウィーラの前任者はダヤスの指示に忠実に従ったという。このジャフナ政府長官はアヌラーダプラから頑強な地元民をバスを使ってジャフナへと運び込み、サティヤグラハを行っているタミル人たちに対抗させた<sup>31)</sup>。

N.Q. ダヤスは不法移民や密輸の取り締まりを口実としてスリランカ北部に軍隊を積極的に派遣した。この「本質的に非軍事的な作戦」のために彼は12隻の高速警備艇を購入した<sup>32)</sup>。前述のギャムヌ・ウォッチ連隊は彼の指示を受け、北部で移民を取り締まる仕事を行った<sup>33)</sup>。ジャヤウィーラの回想録によれば、ダヤスは当時「25年以内に」タミル人の武装反乱が起けると



信じていた。そしてその対策として、北部地域を取り囲むように軍の駐屯地をつくる必要があると考えていた。しかし恒久的な軍事基地の建設はタミル人側からの大規模な反対運動を引き起こす恐れがあった。そのため彼は、真の意図を偽り、不法移民と密輸対策のためだと称して軍隊を配備したのである。ダヤスはこの施策をより円滑に進めるために不法移民と密輸の問題をメディアにリークした。彼の意図通りにこの問題は衆目の関心を集めることになった。そのため軍隊を駐屯させることに表立って反対することは難しかったといわれる<sup>34)</sup>。

N.Q. ダヤスと政治的理念を共有し、ダヤスの「表看板」とも言われたL.H. メッターナンダはその頃反タミルの主張を新聞紙上において精力的に行ったが、その際不法移民の問題にも言及した。彼は、タミル人たちに自治を許すと、北部や東部は不法移民の結集地点となり、それはやがて「シンハラ人の究極的滅亡」につながると述べた。メッターナンダはまた、シンハラ人は土地をなくし、失業や貧困にあえぐ「虐げられた多数派」であり、逆にタミル人たちは「特別な特権」をもっており、彼らのサティヤグラハはその特権に執着しようとする行為だと主張した<sup>35)</sup>。

ところで、密輸や不法移民問題を口実にした北部への軍隊駐留、それもシンハラ仏教ナショナリズムに強く影響された部隊の派遣、その地で実際に行われた軍隊による民間人への過酷な対応、「タミル人叩き」などと呼ばれる「娯楽」、警察のシンハラ化、あるいは妥協を拒否し、むしろ徹底的に弾圧しようとするダヤス自身の指令、そうしたものがタミル人の抵抗運動をより強固なものにしたことは想像に難くない。新言語政策への連邦党による反対運動ははじめはわずかな支持を集めるだけであったが、「粗暴な弾圧」のなかで、「すべての部門のタミル人の意見」を取り込むようになっていった<sup>36)</sup>。

#### 4 1962年のクーデター未遂事件

すでに見たように、1960年のバンダーラナーヤカ夫人の政権成立後には

1960年代のスリランカ政治と N.Q. ダヤス（川島）

私立学校の国有化、軍隊の仏教徒化といった政策が進められた。仏教徒中心の傾向が強まるなかで、非仏教徒、非シンハラ人の将校たちの間には不安が広がっていった。マイノリティである彼らの宗教的、民族的コミュニティの影響力の低下に対して、あるいは民族間の調和や国民統合を犠牲にしてシンハラ人や仏教徒の民族的感情を優先する政治に対して彼らは大きな危機感を抱いていたとされる。こうしたなかで、クーデター計画が高位の士官と警察によって立てられた。しかしこの計画は決行寸前の1962年1月27日に発覚し、首謀者たちは逮捕された<sup>37)</sup>。

首謀者のほとんどはキリスト教徒、特にローマ・カトリック信徒であったので、このクーデター計画は仏教徒の勢力拡大に対する反動であると見られた。また、彼らの多くが富裕な名家出身で名門校で教育を受けたいわば「特権階級」であり、この計画の背後にはこうした上層ミドルクラスの不安があったとも見られている。首謀者の1人に仏教徒が含まれていたが、その家族はアングリカンのキリスト教徒であった<sup>38)</sup>。また、計画に関与しようとした警察官には仏教徒は含まれず、キリスト教徒が多数であった<sup>39)</sup>。

このクーデター計画は、イギリスの外交文書によれば、単に要人の拘束のみを目的にするもので、「かなり未熟で穏やかな出来事」であった<sup>40)</sup>。首謀者たちは、スリランカ南部のカタラガマに向かう途中のバンダーラナーヤカ夫人を拘束する計画であった。成功後には、統一国民党の首相経験者であるダッドリー・セーナーナーヤカとサー・ジョン・コタラーワラがバンダーラナーヤカ夫人とともに政治運営を行うことになっていた。つまり、このクーデターの目的はバンダーラナーヤカ夫人を「その助言者たちの策謀から救出する」ようなものであると考えられた<sup>41)</sup>。

このクーデターによって拘束されることになっていたのは、まず左翼の指導者たち、「2人のダヤス」、そして警察と軍部の非常に高位の人々であった。2人のダヤスとは、フェリックス・ダヤス・バンダーラナーヤカと N.Q. ダヤスであった。この2人は当時バンダーラナーヤカ夫人の政治的経験のなさにつけ込んで権力を操ろうとしているとみなされていた。夫人の甥で

あるフェリックス・ダヤスは事実上の国防大臣であったが、若く未経験であった。それにもかかわらず彼は行政の細部にまで干渉を繰り返したので警察や軍の幹部からの反発は大きかった。他方で、N.Q. ダヤスへの反感もまた明らかに大きかった。すでに見たように、彼はバンダーラナーヤカ夫人の側近としてかなりの権力を握り、軍や行政の仏教徒化の先鋒に立っていた。首謀者の1人であったシドニー・ダ・ゾイサ（Sydney de Zoysa）はクーデターに関する質問に対して、当時の大きな問題は学校の接收であり、N.Q. ダヤスは「仏教ショーヴィニスト」であり、あらゆるものを接收し「仏教国家」の中に持ち込もうとしていると述べた<sup>42)</sup>。

## 5 BJB の設立とポーヤ日

1962年のクーデター未遂事件は軍や行政などの公的機関のさらなるシンハラ化、仏教徒化を促した<sup>43)</sup>。国籍をもたないカトリック尼僧の国外追放は事件直後に行われた政策の一つであった。これもまた仏教委員会が1956年に提言していたことである。報告書は、尼僧たちはキリスト教徒の患者を優先し、仏教僧の病院内での説教を困難にし、カトリック信者の医師や看護師は仏教徒の患者をさまざまな仕方で苦しめていると記した。それゆえ「セイロン化」政策を施行し、「教育を受けたセイロン人の少女たち」にこの仕事を任せるべきであると主張した<sup>44)</sup>。この政策はバンダーラナーヤカ夫人の政権下で1962年6月に採用され、1964年3月までに看護師をしていた140人ほどの尼僧が国外へと去って行くことになった<sup>45)</sup>。

クーデター計画失敗後の公的機関の仏教徒化に大きく関わったのはBJB（Buddha Jathika Balawegaya：仏教国民軍）という民間団体であった。BJBは、仏教普及協会（Buddha Pracharaka Sabha）という組織に属する一群の人々がつくった「戦闘的な仏教徒の団体」であった。支持者は主に仏教徒の公務員であり、『仏教戦線（Baudha Peramuna）』という週刊刊行物を発行していた。BJBは「失った仏教徒の権利を取り戻す」という展望の下に設立さ

1960年代のスリランカ政治と N.Q. ダヤス（川島）

れたのであるが、そのきっかけは前述の1962年のクーデター未遂事件であったといわれる<sup>46)</sup>。イギリスの外交文書によれば、BJBは「狂信的な在家信者」に導かれる「敵意に満ちた反キリスト教団体」であり、「仏教の半狂人的分派集団」であった。L.H. メッターナンダがその総裁であったが、彼は「最も悪名高い」人物であると言われた。N.Q. ダヤスはこの団体にも深く関わっていた。彼はBJBの役員ではなかったが、主導者の1人であるとみなされていた<sup>47)</sup>。

BJBは行政における仏教徒の採用拡大を要請した。彼らはこの点に関しては全セイロン仏教徒会議と歩調をそろえていた。この団体は「カトリック・アクション」の活動を調査する委員会を立ち上げ、宗教団体と行政との関係、軍隊におけるカトリックの割合、職員採用時における宗教的配慮の影響を調べようとしていた。BJBはこの動きに同調し、考古学局などの政府職に非仏教徒を採用することに反対した。また1961年の教育委員会の報告書にあるように宗教別人口等に配慮したクォータ制を採用するように求めた<sup>48)</sup>。

カトリック・アクション批判は、BJBの重要な活動の一つであった。カトリック・アクションとは世界各地で聖職者の下に行われたカトリック一般信者の運動である。1922年に教皇主導の下で世俗化、共産化に対抗すべく始められたものであるとされる<sup>49)</sup>。BJBはこの運動への危機感を煽り、激しく批判した。彼らはそのために『カトリック・アクション——平和と友好への脅威、セイロンのカトリック連合への返答』と題する冊子を出版した。BJBによれば、このカトリックの運動は「信徒の宗教的利益の推進」といった罪のないものではない。その戦略は、あらゆる公的、私的組織へとカトリック信徒を入り込ませ、組織を内部から変容させ、「ヴァチカンのグローバルな野望」に奉仕することであった。その結果「75%が仏教徒人口である国の軍隊が総人口のわずか7%を占めるに過ぎないローマ・カトリック信徒に支配されるようになった」とBJBは主張し、すべての仏教徒は団結してカトリックの運動に立ち向かうよう訴えた。さらに「あらゆる通信は極秘とする」と付言し、公的、私的なさまざまな組織内におけるカトリック・アクション

1960年代のスリランカ政治とN.Q. ダヤス（川島）の動きを報告するように求めた<sup>50)</sup>。こうして多くの組織に配置されたBJBの構成員たちは組織内における採用や昇進を監視し、組織の仏教徒化を進める役割を担った。

BJBはポーヤ日を休日にする運動をも積極的に行った。ポーヤはパーリ語ではウポーサタ（Uposatha）といい、日本語では布薩と呼ばれる。仏教の斎日であり、戒律の遵守を確認する日である。上座仏教においては通常陰暦のなかの4日、つまり満月、新月、二つの半月日がその斎日であるとされていた。スリランカでは一般の敬虔な信者は、月に4度のポーヤ日には八戒を守り、白衣を着て寺院に参拝し、瞑想、読経などで一日を過ごすとなっている<sup>51)</sup>。

ポーヤ日を休日にせよという要求もまた、私立学校の国有化などとともに前述の仏教委員会の提言に沿ったものである。日曜日を休日とする制度は「非常に小さなマイノリティ」の利益のために外国人の支配者によってつくられたものであり、ポーヤ日が休日となっていないことは、圧倒的な多数派である仏教徒の在家信者と仏教僧との「生き生きとした接触」が失われた大きな原因であると報告書は主張した。そして、「仏教徒の道徳的福祉のために、そして民主的要請に従って、すべてのポーヤ日と仏教祭礼日は休日にするよう布告すること」を提言した。またその際、キリスト教徒やムスリムが日曜日や金曜日に宗教的行事を行うことを望んだ場合は、個々の事例に合わせて取り決めがなされるべきであると付け加えた<sup>52)</sup>。

N.Q. ダヤスは公的にはこの仏教委員会に属していなかったが、その活動を陰で支えていた。それゆえ1956年に出版されたこの報告書におけるポーヤ日休日化の主張にもダヤスの意向が反映していた可能性は高い<sup>53)</sup>。1964年の運動に関して言えば、これは明らかにダヤス主導で行われた。この時彼は、すでに見たように、国防外交常任長官として、またバンダーラナーヤカ夫人の側近として非常に大きな影響力を発揮していた。彼はまた公務員の仏教徒組織（Congress of Public and Local Government Services Buddhist Associations）の議長でもあった。ダヤスはその立場から、すべての仏教徒

1960年代のスリランカ政治と N.Q. ダヤス（川島）

の公務員に対してポーヤ日には宗教的な理由による臨時休暇を取ることを要請する通達を出した。その結果、1964年8月22日には中央および地方のいくつかの政府機関では多数の仏教徒が休暇を取り、スタッフの欠如のため業務がほとんど停止した。ダヤス自身はこの日自らの部署の150人を率いてアヌラダプラに巡礼に出かけた。この運動の結果、1964年10月にはそれまで休日とされていなかった8つの満月日が新たに休日とされた<sup>54)</sup>。

しかしダヤスらの活動はそこでとどまることはなかった。彼らは残り40日ほどのポーヤ日を休日にする運動をその後も繰り返した。バンダーラナーヤカ夫人の政権下では、上記の通り、日曜日を休日として残し、1か月に1度の満月のポーヤ日を休日とする制度が成立したのだが、当時野党であった統一国民党は1965年の総選挙では日曜日を休日とする従来の制度そのものを廃止することを公約にした。しかし政権を獲得すると彼らは、月4度のポーヤ日を休日にしようとはしたが、日曜日は残そうとした。それに対して、「強力な仏教徒集団」（おそらくBJBであると思われる）が月4度のポーヤ日の前日を半日休暇とすることを求めた。こうして日曜日を休日とする制度は廃止された<sup>55)</sup>。この新しい制度はその後5年間ほど続いた。しかしこの休日制度は私企業や政府の業務に大きな影響を与え、生産性の低下を招くことになった。そのため、最終的には1971年7月にこの休日制度は廃止され、従来通りの日曜日を休日とする制度が復活した。満月のポーヤ日のみが休日とされることになった<sup>56)</sup>。

## 6 1966年のクーデター未遂事件

1960年7月に成立したバンダーラナーヤカ夫人の政権は経済状況の悪化のなかで次第に行き詰まっていった。事態打開のために彼女はN.M. ペレーラー（Perera）が率いる左翼政党LSSP（Lanka Sama Samaja Party：ランカ平等社会党）と連立を組んだ。トロツキストを自称するLSSPは、ミドルクラスや保守層のみでなく仏教徒に対しても、脅威にはならないというイメー

1960年代のスリランカ政治とN.Q. ダヤス（川島）  
ジ作りをその頃積極的に行っていた<sup>57)</sup>。こうして多くの人々は「魔術師」とも呼ばれたペレーラーがこの国の問題を解決することを望んだ。しかし期待されたペレーラーの経済政策は人々の生活苦を改善しうるものだと認識されず、労働争議は再発し、メディアからの批判は高まった。こうした状況に対抗してペレーラーは巨大なマスメディア企業であったレイクハウス出版を国有化し、他のメディアをも規制しようとした。首相もそれを支持したため、権威主義的、全体主義的傾向を嫌ったC.P. ダ・シルワ（de Silva）は13名の議員と共にスリランカ自由党を離党し、野党に移ることになった。そのためスリランカ自由党は多数派としての地位を失い、バンダーラナーヤカ夫人は1964年12月に議会を解散した<sup>58)</sup>。

その後1965年3月に総選挙が行われ、それまで野党であった統一国民党が政権を担うことになった。それにともないN.Q. ダヤスは国防外交常任長官の任を解かれたが、これによって彼がシンハラ人仏教徒としての活動に費やす時間は格段に多くなったともいわれた<sup>59)</sup>。すでに見たように、彼は4年間の常任長官在任期間中に軍に関わる採用と昇進の多くを仏教徒に制限し、軍隊内部に「戦闘的な仏教団体」を設立しようとした。その際彼自身が多くの人事に深く関与した。そのため彼によって採用されたり、昇進したりした者たちを中心に彼への支持は高かった。先に見たように彼の近衛兵とでも言うような部隊もあった。長官退任後も多くの軍関係者は彼の指導や指示を待ち望んでいたとみられていた。そのため、クーデター計画が発覚したとき、ダヤスは最も疑われた者の1人であった<sup>60)</sup>。

軍隊内部の問題に関して警察は、高位の士官を含む陸軍軍人への聞き取りをかなり前から行っており、1965年7月ごろには軍人たちの「宗教・コミュニティナル団体」との関係、そしてその団体の政治的関与の可能性については調査されていた。前政権下における陸軍兵員の政治的理由による大規模な採用に関する調査も行われた。こうして1965年11月には、陸軍の「宗教・コミュニティナル団体」の士官による陸軍基金の詐取や「間違ったコミュニティ・宗教（wrong community/religion）」に属する者、あるいは彼らの団体に属さない



1960年代のスリランカ政治と N.Q. ダヤス（川島）

者への報復行為があったことが明らかになったと報告された<sup>61)</sup>。

クーデター計画が発覚したことが新聞で報道されたのは1966年2月23日のことであった。これはLSSPの高位の政治家からのリークによるものとされている。この政治家は、この計画は「文民からなるスリランカ自由党支持派の団体」によって立案指導されたと述べた<sup>62)</sup>。このクーデターでは、主導的な閣僚や士官を暗殺、または逮捕した後に軍事評議会を立ち上げることになっていた。1966年2月17日の深夜に実行される予定であったが、その2、3時間前に政府に気づかれたことがわかり、計画は放棄された<sup>63)</sup>。その後2月26日には、関与を疑われた5人の陸軍士官が強制的に休暇をとらされたこと、取り調べを受けた者の1人は「陸軍内のBJBに属する高位の士官」であることが報道された。さらに8人の下士官が逮捕されたことが伝えられた<sup>64)</sup>。

すでに見たように、このクーデターに関して最も疑われた文民の1人はN.Q. ダヤスであった。実際彼は聴取され、パーナドゥラにある彼の親族の家も調べられた<sup>65)</sup>。この計画発覚後の早い時期に彼自身の住居も搜索されたが、関与の証拠は見つからなかった<sup>66)</sup>。ダヤスと軍内部の過激な仏教徒勢力とのつながりに加え、彼が1964年頃に憲法の破棄と権威主義的体制の樹立を主張した人々の1人であると見られていたことも間違いなく聴取理由の一つであった<sup>67)</sup>。しかし、当然のことではあるが、彼が自ら関与を認めることはなかった。

またこの時ダヤスとの関係が深いと考えられていた仏教僧グナナシーハ（Henpitigedera Gnanasīha）が逮捕された（釈放されたのは1969年である）。彼はラーマンニャ派の僧侶で1953年からN.Q. ダヤスとともに活動を始め、全国各地に仏教徒協会を設立した。この組織は1956年の総選挙におけるS.W.R.D. バンダーラナーヤカの勝利に大きく貢献した<sup>68)</sup>。その後この仏教僧がどのように政治に関わったかは必ずしも明らかではないが、スリランカ自由党との強力なつながりは持ち続けたようである。彼は特にバンダーラナーヤカ夫人のスリランカ自由党のための活動家として知られていた。左翼政党

を含むスリランカの政党はその中枢部に仏教僧をかかえることが通例となっていた。明らかに彼はスリランカ自由党においてその役割を果たしていた<sup>69)</sup>。

新聞には、グナナシーハは「政府の親密な同調者であり、首相の強力な支持者」であると書かれた<sup>70)</sup>。グナナシーハは権威主義的な見解をもっていたともしばしば報告された。「ファシスト的傾向で知られる仏教僧」だとも、この党の「狂信派（fanatic wing）」内での彼の活動は、「在家信者の片割れ」であるN.Q. ダヤスに近いものがあるとも言われた<sup>71)</sup>。実際彼は1964年3月には独裁政権の樹立を支持する公開書簡を全国紙に送った<sup>72)</sup>。

このクーデター未遂事件後、ダヤスの名が新聞やイギリスの行政文書に現れることはほとんどなくなった。彼は、バンダーラナーヤカ夫人が再度政権を担うことになった1970年にはインドの高等弁務官となった。しかしこの頃にはダヤスの政治的影響力は明らかにほとんど消失していた。

## おわりに

独立後のスリランカにおいてシンハラ仏教ナショナリズムに基づく政策が本格的に採用され始めたのはS.W.R.D. バンダーラナーヤカが首相に選出された1956年というよりも、彼の妻の政権が成立した1960年であったと言う方が正確である。バンダーラナーヤカ夫人の政治姿勢は暗殺された夫のそれとは大きく異なっていた。彼女の政権においては、1956年に公開された『仏教への裏切り』として知られる仏教委員会の報告書の提言が着実に実行されていた。そしてその施策を進めた中心人物の1人は明らかにN.Q. ダヤスであった。彼はそもそもこの報告書作成を支えた重要人物であったが、国防外交常任長官就任後は夫人のもっとも重要な側近の1人としてきわめて大きな権力を行使した。ダヤスに関わった施策の中でおそらくもっとも重要なものは、軍隊や行政の仏教徒化であった。彼はBJBという組織に関わり、人事において仏教徒を優先し、軍隊や行政の仏教徒化を進める上で重要な役

1960年代のスリランカ政治と N.Q. ダヤス（川島）

割を果たした。また彼は軍隊内に過激な仏教ナショナリズムを信奉する集団をつくり、軍の北部駐屯を拡大した。さらに彼はタミル人との明確な対決姿勢をとった。それらが民族的な関係悪化を招いた大きな原因の一つとなったことは間違いない。

ところで、ダヤスとカーストの関係はいかなるものであったのであろうか。ダヤスが非ゴイガマのカラーワに属していたことはバンダーラナーヤカ夫人にある種の安心感を与えたことは間違いない。少なくとも当時のスリランカにおいては非ゴイガマが最高権力者となることは非常に困難であり、通常の政治過程を経てダヤスが夫人の権力を脅かす可能性はほとんどなかった。ダヤスもおそらくその点を十分に認識しており、政治的野心の表明などという無意味な選択が彼の言動から完全に排除されていた可能性は十分にある。当時のダヤスを同僚として身近に見てきたジャヤウィーラは、ダヤスには政治的野心はなかったと述べているが<sup>73)</sup>、それはダヤスの合理的な選択の結果であったとも考えられる。

しかし彼は本当に政治的野心をもっていなかったのであろうか。十分な能力とシンハラ仏教ナショナリズムに基づく国家の実現という強い願望をもった人物が、最高の権力を行使することによってその夢を果たしたいと考えることはなかったのであろうか。イギリスの行政文書には「首相職を狙うほどの政治的野心をもっているという世評がある」と記されているが、そうした可能性も考慮すべきであると思われる。しかし何度も述べるように、非ゴイガマである彼が通常の民主的プロセスを通してその目標を実現することは非常に困難であった。1964年には彼は権威主義的体制の樹立を考えていたという見方もあったが、その選択はある意味きわめて合理的である<sup>74)</sup>。

1966年のクーデター未遂事件へのダヤスの関与は証拠不十分のため明らかにされなかったが、その可能性が全くなかったとは言えない。さらに、たとえダヤスが直接関わっていなかったとしても、軍内部への彼の強力な影響力を考慮すればクーデター成功後にはダヤスを中心とする政権が生まれた可能性も否定できない。しかしもちろんこれらは推測に過ぎない。さらなる史

料の発掘によって明らかにされる問題であると思われる。

## 註

- 1) James Jupp, *Sri Lanka: Third World Democracy* (London: Frank Cass, 1978), p. 40.
- 2) Janice Jiggins, *Caste and Family Politics of the Sinhalese, 1947-1976* (Cambridge: Cambridge University Press, 2010, 1st published 1979), p. 86.
- 3) Ceylon and the Maldives: Sir Michael Walker's Valedictory Despatch, 15 November 1965, DO 196/324, National Archives, London.
- 4) Ceylon: The First Year of the National Government, 17 March 1966, DO 196/324, National Archives, London; The Ceylon Daily News, *Parliaments of Ceylon 1960* (Colombo: Lake House, c1960), p. 180.
- 5) A. Jeyaratnam Wilson, 'Buddhism in Ceylon Politics, 1960-1965', in Donald E. Smith (ed.), *South Asian Politics and Religion* (Princeton: Princeton University Press, 1966), p. 521.
- 6) Neil De Votta, *Blowback: Linguistic Nationalism, Institutional Decay, and Ethnic Conflict in Sri Lanka* (Stanford: Stanford University Press, 2004), p. 122.
- 7) G. D. Anderson, British High Commission, Colombo, to A. J. Brown, 18 March 1966, DO 196/324, National Archives, London; Mr. N. Q. Dias, From British High Commissioner, June 1964, DO 196/322, National Archives, London; Ceylon: Foreign Policy, 16 July 1964, OD 20/259, National Archives, London.
- 8) Neville Jayaweera, *Jaffna: Exorcising the Past and Holding the Vision: An Autobiographical Reflection on the Ethnic Conflict* (Maharagama: Ravaya Publishers, 2014), p. 69. ダヤス (Dias) は Dayasiri の西洋化された呼称である。N.Q. ダヤスはそのナショナリスト的信条にもかかわらず自らの名前は変えなかった。しかし彼の子どもたちはシンハラ式の呼称を用いている。Jayaweera, *Jaffna*, p. 78.
- 9) S. Thondaman, *Tea and Politics: An Autobiography, Vol. 2: My Life and Times* (Colombo: Vijitha Yapa Bookshop, 1994), p. 186.
- 10) ネヴィル・ジャヤウィーラ氏へのインタビュー, 2012年4月16日, ロンドン郊外にて。
- 11) Ceylon: Foreign Policy, 16 July 1964, OD 20/259, National Archives, London.
- 12) Mr. N.Q. Dias, From British High Commissioner, June 1964, DO 196/322, National Archives, London.
- 13) W.J. Watts, British High Commission, Colombo, 4 December 1964, DO 170/53, National Archives, London.
- 14) Ceylon: Foreign Policy, 16 July 1964, OD 20/259, National Archives, London.
- 15) *The Betrayal of Buddhism: An Abridged Version of the Report of the Buddhist Committee of Inquiry* (Balangoda: Dharmavijaya Press, 1956), pp. 78, 83, 97.

- 16) Donald E. Smith, 'The Sinhalese Buddhist Revolution', in Donald E. Smith (ed.), *South Asian Politics and Religion* (Princeton: Princeton University Press, 1966), p. 482.
- 17) Office of the High Commissioner, Colombo, 26 August 1959, DO35/8956, National Archives, London.
- 18) Smith, 'The Sinhalese Buddhist Revolution', pp. 483-5. 仏教僧が運営するピリウェナ (pirivena) と呼ばれる学校にはこの法律は適用されなかった。
- 19) Smith, 'The Sinhalese Buddhist Revolution', pp. 484, 485; *Final Report of the National Education Commission, 1961, Sessional Paper XVII-1962* (Colombo: Government Press, 1962), p. 139.
- 20) A. Jeyaratnam Wilson, *Politics in Sri Lanka, 1947-1979* (London and Basingstoke: Macmillan, 1979), pp. 21, 129; A. Jeyaratnam Wilson, 'Buddhism in Ceylon Politics, 1660-1965', in Donald E. Smith (ed.), *South Asian Politics and Religion* (Princeton: Princeton University Press, 1966), pp. 522-3.
- 21) Ceylon: Armed Forces and Politics, 15 July 1964, OD 20/259, National Archives, London.
- 22) From Colombo to Commonwealth Relations Office, Internal Political Situation, 6 March 1966, DO 196/324, National Archives, London. 空軍においてはダヤスのこの試みはあまり成功しなかった。The alleged Coup in February 1966, 11 July 1966, DO 196/324, National Archives, London.
- 23) 拙稿「スリランカにおける1956年の政治変革とカースト」『国士舘大学政治研究』5号, 2014年, 25頁。
- 24) Ceylon: Foreign Policy, 16 July 1964, OD 20/259, National Archives, London.
- 25) K. M. de Silva and Howard Wriggins, *J. R. Jayewardene of Sri Lanka: A Political Biography, Vol. II: From 1956 to His Retirement* (Colombo: J. R. Jayawardene Cultural Centre, 1994), p. 155.
- 26) Ceylon: Armed Forces and Politics, 15 July 1964, OD 20/259, National Archives, London.
- 27) The February "Plot" (or "Coup") 1966, 5 May 1966, DO 196/324, National Archives, London.
- 28) Sri Lanka Army, The Gamunu Watch, <http://www.army.lk/highlanders/> (2016年11月11日にアクセス) ; British High Commission, Colombo, 26 March 1964, DO 196/321, National Archives, London. 当時のイギリスの行政文書には、シンハラ連隊第1大隊と呼ばれる組織名も記されている。これは後述する1962年のクーデター未遂事件以後につられた「極端にナショナリスト的」な部隊で、「ダヤスの所有物 (Dias' Own)」とも呼ばれ、バンダーラナーヤカ首相と彼女の腹心 (henchman) であるN.Q. ダヤスの「どんな命令でも」実行すると報告された。この「シンハラ連隊」という組織が何を指すのかは明らかではないが、当時「シンハラ連隊」という部隊が存在していたことは事実である。イギリス行政文書がこの両者およびギャムヌ・ウ

- オッチ連隊を混同した可能性はある。W. J. Watts, British High Commission, 11 November 1964, DO 196/322, National Archives, London.
- 29) From Colombo to Commonwealth Relations Office, Internal Political Situation, 6 March 1966, DO 196/324, National Archives, London.
- 30) Ceylon: Armed Forces and Politics, 15 July 1964, OD 20/259, National Archives, London. 当時、マルクス主義者主導のストライキなどの労働問題に対しても軍隊が使われていた。Ceylon: Armed Forces and Politics, 15 July 1964, OD 20/259, National Archives, London.
- 31) Jayaweera, *Jaffna*, pp. 108-9.
- 32) Ceylon: Armed Forces and Politics, 15 July 1964, OD 20/259, National Archives, London.
- 33) British High Commission, Colombo, 26 March 1964, DO 196/321, National Archives, London.
- 34) Jayaweera, *Jaffna*, pp. 70-72. こうした不法移民の取り締まりは、多くのタミル人たちの不満をさらに高めることになった。北部のタミル人たちの多くはその地で生まれていたとしてもそれを証明するのは困難であったため、出生証明書のない者は不法移民とされ、国籍を失うこともあった。Notes on Visit to Jaffna, G.D. Anderson, 23 September 1964, DO 196/322, National Archives, London.
- 35) *The Ceylon Daily News*, 11 March 1961.
- 36) *Economist*, 11 March 1961, in Behind Mrs Bandaranaike, DO 189/218, National Archives, London.
- 37) Ceylon: Armed Forces and Politics, 15 July 1964, OD 20/259, National Archives, London; De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene of Sri Lanka*, p. 109.
- 38) De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene of Sri Lanka*, pp. 108-9.
- 39) Donald L. Horowitz, *Coup Theories and Officers' Motives: Sri Lanka in Comparative Perspective* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1980), pp. 26, 27, 80.
- 40) Ceylon: Armed Forces and Politics, 15 July 1964, OD 20/259, National Archives, London.
- 41) De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene of Sri Lanka*, pp. 108, 117-8.
- 42) De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene of Sri Lanka*, pp. 108, 117-8.
- 43) Smith, 'The Sinhalese Buddhist Revolution', pp. 487-8.
- 44) *The Betrayal of Buddhism*, p. 113.
- 45) Ceylon: The Resurgence of Buddhism and its Effect on the Christian Community, 15 January 1965, DO 170/53, National Archives, London.
- 46) W.A. Wiswa Warnapala, *The Sri Lankan Political Scene* (New Delhi: Navrang, 1993), p. 226; The Baudha Jathika Balavegaya, *Catholic Action: A Menace to Peace and Goodwill, A Reply to the Catholic Union of Ceylon* (Colombo: The Baudha Pracharaka Press, 1963), Forword.
- 47) Mr. N.Q. Dias, From British High Commissioner, June 1964, DO 196/322, National

- Archives, London; De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene of Sri Lanka*, p.108.
- 48) W. A. Wiswa Warnapala, *The Sri Lankan Political Scene* (New Delhi: Navrang, 1993), pp. 227-8.
- 49) 山崎由紀「極右を求めた社会改革——アメリカにおける第二世代カトリック・アクションの担い手たち」『敬和学園大学研究紀要』22号, 2013年, 223頁。
- 50) The Buddha Jathika Balavegaya, *Catholic Action*, pp. 117, 124; 拙稿「スリランカのカトリック・コミュニティと宗教的ナショナリズム」『国士舘大学政治研究』2号, 2011年, 39-42頁。
- 51) 鈴木正崇『スリランカの宗教と社会——文化人類学的考察』春秋社, 1996年, 95, 116頁。
- 52) *The Betrayal of Buddhism*, pp. 104-108.
- 53) 拙稿「スリランカにおける1956年の政治変革とカースト」20頁。
- 54) Ceylon: The Resurgence of Buddhism and its Effect on the Christian Community, 15 January 1965, DO 170/53, National Archives, London; Extract from Ceylon Fortnightly Summary for the Period 14 August to 27 August, 1964, DO 196/322, National Archives, London; De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene of Sri Lanka*, p. 122.
- 55) *The Times*, 29 December 1966, in DO 196/324, National Archives, London.
- 56) George D. Bond, *The Buddhist Revival in Sri Lanka: Religious Tradition, Reinterpretation and Response* (Delhi: Motilal Banarsidass, 1992, 1st published 1988), pp. 96-7.
- 57) W. J. Watts, British High Commission, 4 July 1964, DO 196/322, National Archives, London.
- 58) Ceylon: The Defeat of Mrs. Bandaranaike's Government, 26 January 1965, DO 196/323, National Archives, London; Ceylon and the Maldives: Sir Michael Walker's Valedictory Despatch, 15 November 1965, DO 196/324, National Archives, London.
- 59) The February "Plot" (or "Coup") 1966, 5 May 1966, DO 196/324, National Archives, London.
- 60) From Colombo to Commonwealth Relations Office, Internal Political Situation, 6 March 1966, DO 196/324, National Archives, London.
- 61) February Coup Plot, Calendar of Events, 5 May 1966, DO 196/324, National Archives, London.
- 62) February Coup Plot, Calendar of Events, 5 May 1966, DO 196/324, National Archives, London; *The Ceylon Daily News*, 24 February 1966.
- 63) Extract from Ceylon Fortnightly Summary No.8, 1966, 6 April to 20 April, DO 196/324, National Archives, London.
- 64) February Coup Plot, Calendar of Events, 5 May 1966, National Archives, London.
- 65) *The Ceylon Daily News*, 24 February 1966.
- 66) The February "Plot" (or "Coup") 1966, 5 May 1966, DO 196/324, National Archives, London.



- 67) Mr. N.Q. Dias, From British High Commissioner, June 1964, DO 196/322, National Archives, London.
- 68) Jupp, *Sri Lanka*, p. 59; 拙稿「スリランカにおける1956年の政治変革とカースト」25-26頁。
- 69) Jupp, *Sri Lanka*, p. 171.
- 70) *Ceylon Observer*, 8 November 1964, DO 196/322, National Archives, London.
- 71) The February “Plot” (or “Coup”) 1966, 5 May 1966, DO 196/324, National Archives, London; Ceylon Fortnightly summary No. 22, 24 October to 6 November 1964, Political Situation, DO 196/324, National Archives, London. 捜査の対象となった者のなかに「ティッサ博士」と呼ばれる人物がいた。彼は「ウィクレマシンハ博士」とも呼ばれるのだが、後にロハナ・ウジェウィーラ（Rohana Wijeweera）として知られることになる JVP（人民解放戦線）の指導者である。当時の状況を報告したイギリスの国防アドバイザーも「ティッサ」という名に触れ、彼はソ連大使館の従業員であるとした。また、スニル・ヘワージェという人物も捜査の対象になった。彼はタス通信の従業員で、在コロンボ・ソ連大使館の情報局に属し、共産主義者の青年リーダーであった。また、ティッサは彼の同郷人（compatriot）であるとも、仲間（sidekick）であるとも言われた。このクーデター計画に対するこれらの人々、あるいはソ連の関与に関してはほとんど何も明らかになっていない。De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene of Sri Lanka*, p. 156; The February “Plot” (or “Coup”) 1966, 5 May 1966, DO 196/324, National Archives, London; Jupp, *Sri Lanka*, p. 26.
- 72) De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene of Sri Lanka*, p. 128.
- 73) ネヴィル・ジャヤウィーラ氏へのインタビュー，2012年4月16日，ロンドン郊外にて。
- 74) Mr. N.Q. Dias, From British High Commissioner, June 1964, DO 196/322, National Archives, London.